

令和 5 年 度 学 校 総 合 評 価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

学校の現況と課題を鑑み、今年度は重点課題として、①キャリア教育を取り入れた学習活動の充実（学習活動）、②児童生徒への読書推進活動（特別活動）③教員の授業力向上に関する校内研修（その他）の3項目を掲げた。

重点目標の評価については、別添「8 学校アクションプラン」に記載のとおり、達成度及び取組状況から総合的に判断して、②児童生徒への読書推進活動（特別活動）を除き、おおむね当初の目標を達成することができたと考える。②児童生徒への読書推進活動が目標達成できなかった原因としては、予定していた実施期間に児童生徒の欠席が想定以上に多かったことにあると思われる。

学校評議員からは、「①今後もキャリア教育の充実とレベルアップを目指すために、振り返り際にはICTを効果的に活用するとともに、生徒のキャリア発達を促す教員の関わり方を工夫してほしい。」、「②図書室やパソコン絵本、移動文庫の整備など、読書推進のための企画・実施の努力をしている。全校体制で読書する時間を設定したり、タブレット端末を活用したりできるとよい。」、「③授業改善では、チェックリストや手本となる授業ビデオを作成し、目指すところを明確にして取り組む方法もある。学校が子供たちのためにいろいろな研修を行っていることを保護者に伝える方策があるとよい。」など、それぞれの立場からの意見や要望等をいただいた。

7 次年度へ向けての課題と方策

今年度の重点課題への取組に関する学校評議員からの意見を基に、次年度への課題と方策を次のようにした。

- ① 生徒が自身の変容や成長を実感できるような取組を行い、目標設定や振り返りを行うための環境やツール等の工夫、教師の対話力の向上を目指す。
- ② 図書室の利用度を高めるとともに、自宅や教室で利用できるデジタル図書の活用とその利便性について情報共有し、読書活動の推進を目指す。
- ③ 児童生徒の実態をより適切に踏まえたうえで授業実践・授業改善するために、実態把握に関する研修・方法等の工夫を目指す。

8 学校アクションプラン

令和5年度高志支援学校アクションプラン - 1 -		
重点項目	学習活動 - 中学部 -	
重点課題	キャリア教育を取り入れた学習活動の充実	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 進路に関する学習は、主に学級活動、生活単元学習、総合的な学習の時間に行っている。1年生は、自己の特性や性格等について理解を深める学習を、2年生は、近隣施設の見学や体験学習を通して学校卒業後の生活について考える学習を、3年生は、高等部の体験入学等に参加して中学部卒業後の進路を決定するための学習を行っている。また、全学年での各学期や行事では、目標設定と振り返りを行って、自身の変容や成長を実感したり、新たな自分の可能性に気付いたりできるようにしている。 目標設定と振り返りの方法は、ワークシートに記録する学級もあれば、タブレット端末を使って動画や写真を用いて振り返る学級もある。また、記録等は年度末に家庭に持ち帰るため、昨年度の記録を振り返ったり、それぞれの学年ごとの自身の変化を確認したりすることが難しい。 	
達成目標	「振り返りノート」を作成して、自身の変容や成長を振り返る回数	生徒一人当たり 5回以上
	作成した「振り返りノート」を次年度に引き継ぐ	生徒全員
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができるように、行事や進路に関する学習等の際に、生徒が学習の目標を立て、学習したことを振り返る活動を計画的に実施する。 生徒一人一人の実態に応じた自己評価の工夫を行う。 身近な人から認められる機会が得られるよう、保護者や教員等からコメントを得られる工夫を行う。 次年度に引き継ぐよう、作成した「振り返りノート」はファイルに綴じ、学年や学部を超えた学びの蓄積を確認できるようにする。 12月に教員で「振り返りノート」の成果と課題について意見を交換する。 	
達成度	「振り返りノート」を作成して、自身の変容や成長を振り返る回数	生徒一人当たり 5回以上
具体的な 取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 行事や進路に関する学習等の際に、生徒が目標を立て振り返る活動を計画的に実施し、作成した「振り返りノート」をファイルにとじて蓄積した。 自らの変容や成長を実感できる評価となるよう、生徒一人一人の実態に応じて「振り返りノート」の様式の工夫や、ICT機器の効果的な活用に取り組んだ。 「振り返りノート」の活用における成果と課題について、12月に中学部教員全員にアンケートを実施し、その結果の考察と意見交換を行った。 	
評 価	A	<ul style="list-style-type: none"> 「目標-実践-振り返り」を繰り返すことで、生徒が考える目標や反省の内容が、より具体的に変化していった。 「振り返りノート」には保護者にもコメントを記入してもらい、生徒は教員以外の身近な人から褒めてもらう機会となった。 生徒の思いをより引き出すためには、「振り返りノート」の作成を通して教員が対話的に関わる重要性と、問い掛けの言葉を工夫する必要性を実感することができた。
学校関係 者の意見	今後もキャリア教育の充実とレベルアップを目指すために、振り返り際にはICTを効果的に活用するとともに、生徒のキャリア発達を促す教員の関わり方を工夫してほしい。	
次年度に 向けての 課 題	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が自己の生き方や進路について主体的に考えることができるよう、進路に関する学習や行事だけでなく、普段の授業においても、自身の変容や成長を実感できるような取組が必要である。 環境やツール等を工夫するとともに、教師の対話力をより向上させることで、生徒の願いや思いを引き出した目標設定や振り返りを行う必要がある。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

令和5年度高志支援学校アクションプラン -2-

重点項目	特別活動 ー情報教育部図書ー	
重点課題	児童生徒への読書推進活動	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・毎年度、新刊図書と寄贈本を合わせて約70冊を入れている。 ・図書はジャンルごとに排架されており、目的の図書を見つけやすい。 ・図書室は、校内のほぼ中心部の位置にあり、小中学部は比較的に利用しやすい場所である。しかし、離れている高等部の利用者は例年少ない状況にある。併せて、近年医療的ケアの児童生徒の比率が増え、児童生徒が図書室を利用する機会が少ない。 ・中学部・高等部の休憩時間は5分であり、移動にも時間がかかることから、図書室の利用は授業時間中がほとんどである。 ・1か月に一冊も借りない児童生徒が全体の約27.94% (内訳：小学部19.23%、中学部37.50%、高等部30.76%) <令和4年11月> 	
達成目標	校内読書月間（1か月）に1冊以上借りた児童生徒の割合	80%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・図書室まで来なくても図書を利用できるように、高等部に移動文庫を設置する。 ・児童生徒の多様な実態に応じて図書を活用できるように、デジタル図書の活用方法を提案する。 ・秋に「本祭り」を企画し、新刊紹介やパネルの設置などを行い、図書室を利用したくなるような環境を整えると共に、校内読書月間に合わせ、おすすめの本を紹介したり、読書に親しむ写真を各学級から一枚程度募集したりして、掲示する。 ・本を好きになることができるように、定期的に「本と出会う集会」を開催し、読み聞かせや本にまつわる話などを聞く機会を設ける。 	
達成度	校内読書月間（1か月）に1冊以上借りた児童生徒の割合 平均72.13% (内訳：小学部61.54%、中学部92.31%、高等部72.73%)	
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部に10月下旬から移動文庫を設置した。 ・デジタル図書については、共有タブレット、ゲーグルクラスルームを利用したシステムの利用、図書室前にパソコンをつないだテレビの設置を実施した。 ・「本祭り」や校内読書月間に児童生徒の感想画や紹介文、読書に親しむ写真などを図書室内や掲示板に掲示した。 ・学校図書館司書による読み聞かせ、「お話宅配便2023」「本と出会う集会」等を実施した。 	
評 価	C	<ul style="list-style-type: none"> ・中学部では、授業と連携することで92.31%と目標を達成した。 ・高等部では、移動文庫設置前の9月は47.54%だったものが、設置後貸出数の伸びが見られ72.73%となったが、目標には達しなかった。 ・小学部は、5月以降50%を超える一定の貸し出し数があり、校内読書月間中の11月は61.54%と伸びがみられたが、目標に達しなかった。データの取り方が限定的であったことと、校内読書月間中の11月に体調不良で長期欠席をする児童が多かったことが一因ではないかと考えられる。
学校関係者の意見	図書室やパソコン絵本、移動文庫の整備など、読書推進のための企画・実施の努力をしている。全校体制で読書する時間を設定したり、タブレット端末を活用したりできるとよい。	
次年度に向けての課題	毎月のテーマに沿った図書の紹介等の環境整備や読書の木、読み聞かせ等の企画立案により、図書室の利用度を高めるとともに、自宅や教室で利用できるデジタル図書の活用とその利便性について情報共有し、読書推進を図る必要がある。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

令和5年度高志支援学校アクションプラン - 3 -

重点項目	その他 - 研修部 -	
重点課題	教員の授業力向上に関する校内研修	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の児童生徒の障害の状況や実態に合わせて、指導（授業）を行うには、まず、障害の状態や特性及び心身の発達段階等を的確に把握することが必要であり、毎年、外部の専門家から対象児童生徒の実態把握の視点や支援方法等について指導助言を受ける研修会を実施している。 ・例年、教員の授業力向上を図る校内研修として、研究授業を行い、対象児童生徒に関わる教員で、実態、指導内容・方法、学習評価について検討して、授業改善に取り組んでいる。 ・昨年度末の授業実践・授業改善に関するアンケートでは、「目標達成に向けた学習内容を選定できたか」や「学習評価を基に授業改善の視点を導き出すことができたか」の問いに、「できた」「少しできた」と回答した教員が70%いた。 ・昨年度末の学校課題に関するアンケートでは、「実態把握が的確かどうか不安である」「自分の授業を客観的に見たい」「もっと教員間で情報交換ができるとよい」等の意見があった。 ・今回の学習指導要領の改訂で期待される「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業実践・授業改善を積み重ね、授業力の向上を図る必要がある。 	
達成目標	授業力向上に関する研修会の実施（全体研修会2回、グループ研修5回×9グループ、障害種別研修会各学部1回）	のべ51回以上
	事後アンケートで、授業の目標が「達成できた」「一部達成できた」と答えた教員の割合	85%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・9つの研究グループ（小学部3、中学部2、高等部3、分教室1）を編成し、PDCAサイクル2回以上の研究授業を実施し、授業計画・評価・授業改善のための研修会を5回以上行う。 ・全体研修会を2回実施して、授業力向上に関する校内研修の進め方について共通理解を図る。また、取組の状況を報告し合い、成果と課題を共有する。 ・外部の専門家から対象児童生徒の実態把握と支援方法について指導助言を受ける研修会（障害種別研修会）を各学部1回実施する。 ・事後アンケートを実施し、研修全体及び自身の取組の成果と反省、どのような取組が授業力の向上につながったか等を確認する。 	
達成度	授業力向上に関する研修会の実施	のべ63回
	事後アンケートで、授業の目標が「達成できた」「一部達成できた」と答えた教員の割合	96%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・2回の研究授業と授業計画・評価・授業改善のための研修会を各グループ6～10回、全体研修会を2回、障害種別研修会を各学部1回ずつ実施し、授業改善の視点や、一人一人に合った指導・支援の在り方について学んだ。 ・事後アンケートでは、授業づくりシートを活用し、授業改善の視点に基づいた授業の立案や実践ができたか、児童生徒の変容につながったかどうか等の自身の取組についての気づきを集約した。 	
評 価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ研修会では、児童生徒の姿から、多くの気づきや改善案が出され、実態の捉え直し、学習内容・支援方法等の工夫を重ねて授業を改善することができた。また、その視点を次の単元や他の教科等につなげた。 ・外部の専門家（療法士や福祉施設職員）の指導助言を生かし、児童生徒の姿勢や教材、支援方法等を工夫して授業実践する教員が多く見られた。 ・全体研修会では、実践で得た授業改善の視点や生徒の変容などの成果を共有し、日々の実践に生かすことができた。 ・事後アンケートから、授業づくりシートを活用することで、指導内容や方法を見直すことができたなどの教師の気づきが多くあり、授業力向上につながった。
学校関係者の意見	授業改善では、チェックリストや手本となる授業ビデオを作成し、目指すところを明確にして取り組む方法もある。学校が子供たちのためにいろいろな研修を行っていることを保護者に伝える方策があるとよい。	
次年度に向けての課題	グループ研修会では、児童生徒の実態把握の不十分さが話題にあがるが多かった。事後アンケートで授業の目標が「一部達成できた」と回答した教員が多かったこともこの理由の一つと考えられる。児童生徒の実態をより適切に踏まえたうえで授業実践・授業改善するために、実態把握に関する研修・方法を工夫していきたいと考える。	

（評価規準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）